平成26年度

宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国　　語

注　　意

1　監督者の「始め」の合図があるまでは，開いてはいけません。

2　試験時間は，板書されている時間割のとおりの50分間です。

3　問題数は大きな問題が4問で，表紙を除いて10ページです。 四 は記述問題です。

4　解答用紙は2枚で，答え方はマークシート方式と記述式です。

5　監督者の指示にしたがって，試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き，さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。

6　監督者の指示にしたがって，試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き，さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。

7　答えは，それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって，ていねいに記入しなさい。

8　試験中に質問があれば，手をあげて監督者に聞きなさい。

9　監督者の「やめ」の合図があったら，すぐやめて，鉛筆をおきなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

劣等感のない人はいないと思うが、人間はなぜ劣等感をもつのであろうか。それは他者と自分とを比較するからである。ではなぜ人間は他者と自分を比較するのであろうか。他者と自分とを比較するのをやめれば、たちどころに劣等感なんかなくなってしまうであろうが、それがやめられないのはなぜであろうか。それは、人間にとって自分というもの――自我と呼んでもいいが――がそもそも他者との比較の上に成り立っており、他者がいないとすれば、自分も存在しなくなるからである。われわれは①自分が他者にとって何であるかということによって、自分のアイデンティティを見出し、世界のなかにおける自分の位置を見定めることができるのであり、われわれの存在は 1 によって支えられているのである。 2 の支えがなくなれば、われわれの 3 は空中分解する。（ a ）劣等感に苦しんでいる者に、人のことなどどうだっていいではないか、人が自分より優れていようが劣っていようが気にすることはないではないか、自分は自分ではないか、みずから自分を省みてそれでいいと思えるなら、それでいいではないか、などと言ってみたところで、説得力はないであろう。

しかし、上を見ればキリがなく、下を見ればキリがなく、自分より優れている者もいっぱいいるけれども、劣っている者もいっぱいいるわけで、それなら、いつも自分より劣っている者と自分を比較して優越感だけもっていればいいのに、われわれはともすれば、自分より優れている者と自分を比較し、わざわざ苦しい劣等感に囚われるのはなぜであろうか。〔 Ⅰ 〕それは、実のところ、他者ではなくて自分なのである。〔 Ⅱ 〕自分だからこそ、気にしないでいることができないのである。〔 Ⅲ 〕自分と言っても、それは、現在の現実の自分ではなく、幼かった遠い昔のナルチシズム(注1)の時代、天上天下唯我独尊(注2)の時代の全知全能の誇大妄想的な自分、幻想的な自分である。〔 Ⅳ 〕そのような幻想我と現実の自分とを比較するのだから、現実の自分が劣っているのは当然である。

A しかし、現実の自分はあまりにもありふれていて、みすぼらしく、現実の自分においてそれを復元しようとするのは容易なことではない。

B その全体を復元できないまでも、せめてその一部分、一要素なりと復元できないものかとつねづねウロウロ、ガツガツしている。

C このナルチシズム時代の自分、つまり幻想我は今や失われているのであるが、われわれはこの失われた自分をつねに探し求めている。

D そういうとき、それを一部分なりと復元しているかのように錯覚される他者を見出すのである。

そして劣等感に襲われる。そのときの他者とは、本来ならば自分が手に入れるべきものを横取りした奴(やつ)であり、われわれは対抗意識を燃やし、もし可能ならば彼を引きずりおろそうとするが、たいていの場合は不可能なので、劣等感を抱いて悶々(注3)とする。（　b　）彼をいやが上にも賛美し、彼の崇拝者として彼につながることによって、あたかも彼を自分の分身であるかのように感じ、彼と自分との距離を消すことによって②劣等感から逃れることもある。

こういう場合も、崇拝者は被崇拝者に対する敵意を心のどこかに秘めているものであって、それが表に現われれば、熱狂的なファンが憧れのスターに硫酸をひっかけたり、ピストルの弾をぶちこんだりする事件となる。被崇拝者も本来ならば崇拝者に属するべきものを横取りした奴であることには変わりはないからである。被崇拝者の崇拝すべき点が、崇拝者と関係のないものであれば、あるいは一般的に言えば、優者の優れている点が劣者と関係のないものであれば、賛美するはずもないし、羨ましがるはずもないし、劣等感を抱くはずもない。われわれは自分が空を飛べないからと言って、飛んでいる雀(すずめ)に劣等感はもたないし、桜の花が美しいからと言って、桜に劣等感はもたない。

③劣等感は人間につきものみたいなものであるから、劣等感から決定的に解放される方法はないであろう。もしただ一つ、その方法があるとすれば、自分より優れている人たちを自分とは関係のない別の世界の人たちと見なして、あきらめることであろう。昔の庶民は貴族に対して別に劣等感はもっていなかったであろう。（　c　）、現代は平等主義の時代で、タテマエとしてはすべての人が平等に何にでもなれることになっているから、④現代人は昔の人より劣等感に苦しんでいるのであろう。別に平等主義がいけないとは言わないが、人びとの劣等感を大いに刺激し、増大させたことは間違いない。また、おとなと青年をくらべてみると、青年は将来に希望をもち、いろいろな者になれる可能性をまだあきらめていないことが多いであろうから、おとなよりも青年のほうが劣等感が一般に強いであろう。

（　d　）、すべてにあきらめてしまって劣等感をもたなくなったら人間はやることがなくなるのではなかろうか。嫉妬は人間のもっとも強い感情であり、劣等感補償は人間行動の最大の動機である。人が言ったりしたりしていることの大半は、むずかしい複雑なことを考えなくても、嫉妬と劣等感補償が動機ではないかという仮説を立てれば明快に説明がつく。

（岸田秀(きしだしゅう)「不惑の雑考」から）

（注1）ナルチシズム＝自己愛

（注2）天上天下唯我独尊＝宇宙空間に、自分より尊いものはないという意

（注3）悶々(もんもん)＝悩み苦しむさま

問一 ①自分が他者にとって何であるかとあるが、その具体例として適当でないものはどれか。

ア 男にとって女
イ 親にとって子
ウ 優者にとって劣者
エ 私にとって動物

問二 1 から 3 に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア [1 自我　2 自我　3 自我]
イ [1 自我　2 他者　3 自我]
ウ [1 他者　2 他者　3 自我]
エ [1 他者　2 自我　3 自我]

問三 （　a　）から（　d　）に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア [a あるいは　b ところが　c しかし　d したがって]
イ [a したがって　b あるいは　c ところが　d しかし]
ウ [a しかし　b したがって　c あるいは　d ところが]
エ [a ところが　b しかし　c したがって　d あるいは]

問四 次の一文が入るところは、本文中の〔　Ⅰ　〕から〔　Ⅳ　〕のどこか。適当なものを後から選べ。

自分より優れている他者とは一体、誰であろうか。

ア 〔　Ⅰ　〕　**イ** 〔　Ⅱ　〕　**ウ** 〔　Ⅲ　〕　**エ** 〔　Ⅳ　〕

問五 本文中の A から D の文を正しい順序に並びかえたものは、次のどれか。

ア [C → B → D → A]
イ [A → C → B → D]
ウ [C → B → A → D]
エ [A → D → B → C]

問六 ②劣等感とあるが、それは何から生まれるのか。適当でないものを次から選べ。

ア 自分を支えている他者とアイデンティティを確立しようとする自己とを比較するところから生じる。
イ 自分より優れている者と自分とを比較してしまったところから生まれる。

ウ　失われた幻想的な自分と現実の自分とを比較するところから生まれる。

エ　ありふれている今の自分と自己愛にあふれていた過去の自分とを比較するところから生じる。

問七　③劣等感は人間につきものみたいなものであるとあるが、その理由として最も適当なものはどれか。

ア　劣等感を持つことで他者と自分との立場の違いを見出すことができるから

イ　劣等感は特に若い青年期に感じるものであり、だれもが一度は持つものだから

ウ　人間はみずから自分を省みるために他者と自分とを比較し、成長しようとするから

エ　人間にとって自分の存在そのものが他者との比較によって成り立っているから

問八　④現代人は昔の人より劣等感に苦しんでいるのであろう。とあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア　現代はたとえタテマエだけであったとしても平等主義とされているため、自分より優れている人々を素直に認められず、常に劣等感を持ち続けているということ

イ　現在は平等主義がタテマエとされる時代のため、自分との比較対象が無数にあることで優劣が発生し、劣等意識も生まれるということ

ウ　現在の社会は平等主義であるため、特に青年が自分の将来の可能性を広げようとし、あえて劣等意識をもって自分の成長をはかる風潮があるということ

エ　現代は平等主義の幻想にとらわれた時代のため、だれもが将来のいろいろな可能性を捨て去ることができず、劣等感から解放されないということ

問九　本文の中で述べられている内容に合わないものはどれか。

ア　平等主義といわれる現代でも生まれながらの身分差が存在するため、そこに劣等意識が生まれる。

イ　他者とは本来ならば自分が手に入れるべきものを横取りした奴、すなわち失われた自分である。

ウ　幻想の自分と現実の自分とを比較することがなければ、劣等感を持つことはないと言える。

エ　すべてをあきらめれば、人間は劣等感から解放されるかもしれない。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「太郎（たろう）」は画塾を営む「ぼく」に対し、心を閉ざし、絵筆を取ろうとしなかった。ある日、川原で一緒に水遊びをしていた時に、巨大なコイを目撃した。そのことがきっかけで、徐々に「太郎」は「ぼく」に心を開いていくようになった。

川原へいった日から太郎とぼくとのあいだには細い道がついた。彼はアトリエ(注1)にやってくると、ぼくにぴったり体をよせて、グワッシュ(注2)を練るぼくの手もとをじっと眺めた。ぼくは貧しいので子供に高価な画材を買ってやれない。市販のものと効果に大差のないことがわかってから、毎日ぼくはアラビア・ゴム(注3)と亜麻仁油(注4)と粉絵の具を練りあわせてグワッシュをつくる。ときに高学年の生徒が希望すると、カンバス(注5)や油絵の具までこしらえてやることもある。ぼくはアトリエの床に足をなげだしてすわり、まわりに子供を集めて、ヘラをうごかしながら話をしてやるのである。太郎はぼくのしゃべる動物や昆虫や馬鹿ひょうきん者の話に耳をかたむけ、よほどおもしろいと顔をあげて、そっと笑った。形のよい鼻孔のなかで鳴る小さな息の音や、さきの透明な白い歯のあいだからもれる清潔な体温など、太郎の体を皮膚にひしひしと感じながら、ぼくは彼と何度も逃げたコイのことを話し合った。

「水のなかではね、物はじっさいより大きく見えるんだよ。だけど、あいつはほんとうに大きかったんだ。そうでなきゃ、藻があんなにゆれるはずがないもんな。きっとあれはあの池の主だったんだよ」

①［　　］

「……」

太郎はぼくの話がおわると、澄んだ眼（め）にうっとりした光をうかべた。それをみてぼくは巨大な魚が森にむかって彼の眼の内側をゆっくりよこぎっていくのをありありと感じた。ぼくは話をしながら彼の眼のなかの明暗や濃淡をさぐって、何度もそうした②［　　］交感の瞬間を味わった。そうやってぼくは彼から③［　　］旅券を発行してもらったのだ。画塾には二十人ほどの子供がやってくるが、そのひとりひとりがぼくにむかって自分専用の言葉、像、まなざし、表情を送ってよこす。その暗号を解して、たくみに使いわけなければぼくは旅行できないのだ。他人のものはぜったい通用を許してもらえないのだ。人形の王国を支配している子には、ぼくはときどき内閣の勢力関係を聞いてやらねばならない。この子は自分の持っているさまざまな人形で政府をつくって遊んでいるのである。

「いまはタヌキかい？」

「いや、象だよ」

「ダルマは隠退(注6)したの？」

「うん、ここんとこちょっと人気がないね。あれは階段から落ちて

骨が折れたんだよ」

「惜しい奴なんだがね――」

この子がアトリエに出入りするとき、なんとなくぼくはそんな挨拶を交わしあって完全な了解を感じている。

旅券をくれてからまもなく、太郎はぼくの話のあいだに、とつぜん

「先生、紙」

といいだすようになった。〔 Ⅰ 〕それが度かさなって、ぼくが

「おや、また便所？」

とからかうと

「ヤだな、先生ったら。画を描くんだよ」

そんな軽口をきいて彼はぼくから紙や筆や絵の具皿をとっていくようになった。

太郎は新しい核を抱いたのだが、その放射する力がスムーズに流れだすためには時間がかかった。〔 Ⅱ 〕彼はぼくと話をしているうちに④胎動をおぼえて紙を要求したが、いざ絵筆をとってみると、どうしてよいのかわからなくなって立往生(注7)することがしばしばあった。母親に手をとってもらうか、手本をみるか、いつかおぼえた人形をくりかえすか。〔 Ⅲ 〕こんなことしかやったことのない彼は⑤体内のイメージの力と白紙の板ばさみになって苦しんだ。彼は筆でめちゃくちゃになぐった紙をもってきて、ぼくにささやくのだった。

「先生、描いてよ。ねえ、こないだのコイだよ、ねえ……」〔 Ⅳ 〕

彼は体をすりよせ、ひかえめながらも一人息子の⑥傲慢さをかくした甘え声をだした。だまっていると、ぼくの体をおしたり、ついたり、ひょっとするとうしろに回って背をつねったりする。それも皮膚を厚くつままず、ほんとうに効果を計算して爪と爪だけで焼くようにチリッとやるのである。その痛さに身ぶるいしながら、ぼくは彼があえいでいるのを感じた。また、⑦いよいよ脱皮しかけたなとも思った。抑圧の腫物のかさぶたを全身につけたまま彼はぼくに向かって迫ってきはじめたのだ。こうなると食われてしまうよりほかに道はない。ぼくは山口(注8)のように美しく器用にさけることができないのだ。彼は自動主義(注9)を子供にあたえることで自分を守った。つぎからつぎへ画塾にやってくるさまざまな症状の子供とつきあっているうちにぼくは自分自身の画を描く動機を失ってしまったのだ。気がつくと⑧ぼくは小さな、生きた肉体の群れをカンバスと感ずるようになっていた。

（開高健「裸の王様」から）

（注1）アトリエ＝画室
（注2）グワッシュ＝水彩画用の絵の具
（注3）アラビア・ゴム＝絵の具に調合する液体
（注4）亜麻仁油＝インクの原料
（注5）カンバス＝油絵用の画布
（注6）隠退＝ここでは隠居のこと

（注7）人形をくりかえす＝今まで太郎は母親の言いつけに従い、特定の女の子としか遊ばず、人形の画ばかり描いていた
（注8）山口＝「ぼく」の絵の仲間
（注9）自動主義＝自由に伸び伸びと教育することで、子供の資質・能力を伸ばすという考え方

問一 ①「……」とあるが、「太郎」が沈黙した理由として最も適当なものはどれか。

ア 「ぼく」のコイの話でかつて見たコイの姿が目に浮かび、その姿に酔いしれているから
イ 「ぼく」のコイの話に自分との食い違いを感じ、自分だけのコイの像を追いかけようとしているから
ウ 「ぼく」のコイの話の熱心な話しぶりに、思わずのめりこんでしまったから
エ 「ぼく」のコイの話で想像が膨らみすぎて、コイを言葉に表すことができなくなったから

問二 ②交感の瞬間とあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア 目撃したコイが同じであることを確認できた瞬間
イ コイに対する反応から、「太郎」の気持ちが読めた瞬間
ウ 目撃したコイのことを話し合う中で一体感を感じた瞬間
エ コイに対する相反する互いの気持ちを理解した瞬間

問三 ③旅券とあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア 気持ちのやり取りをする許可
イ 心に入り込む権利
ウ 気持ちを理解する方法
エ 心を開く機会

問四 次の一文が入るところは、本文中の〔 Ⅰ 〕から〔 Ⅳ 〕のどこか。適当なものを後から選べ。

> 彼の内部にはぼくにも彼自身にも正体のわからない、すっかり形の変わってしまったガラクタが海岸のように打ち上げられているはずであった。

ア 〔 Ⅰ 〕 **イ** 〔 Ⅱ 〕 **ウ** 〔 Ⅲ 〕 **エ** 〔 Ⅳ 〕

問五 ④胎動、⑥傲慢さの本文中での意味の組み合わせとして適当なものは、次のどれか。

ア 〔④奇抜なアイディア ⑥偉ぶってわがままなこと〕
イ 〔④微妙な違和感 ⑥自分の狭い考えにこだわること〕
ウ 〔④かすかな心の動き ⑥幼稚で軽薄なこと〕
エ 〔④わき上がる衝動 ⑥おごり高ぶって見下すこと〕

問六 ⑤体内のイメージの力と白紙の板ばさみになってとあるが、その説明として適当なものはどれか。

ア 内部のイメージを外部に表現しようとすると、もともとのイメージが消えてしまうこと

イ 内部のイメージが自分を突き動かすが、それを思うように表現できないこと

ウ 内部のイメージを伝えたいという気持ちと、母親に言われるままの自分でいたいという心理が混在していること

エ 内部のイメージが強大すぎて、それを表現しきれず逃げるしかできないこと

問七 ⑦いよいよ脱皮しかけたなとも思った。とあるが、どのようなものからの「脱皮」なのか、次から選べ。

ア 自分の欲求のみを優先し、他人に与える痛みを理解しようとしない身勝手な自分自身

イ 周囲の子供たちを差し置いて、「ぼく」の愛情を独占しようとする利己的な自分自身

ウ 周囲の状況が自分の思い通りにならない場合、責任を他に転嫁(てんか)しようとする甘えた自分自身

エ 周囲の言いなりで、自分の意見を外部に表現しようとしない主体性のない自分自身

問八 ⑧ぼくは小さな、……感ずるようになっていた。とあるが、その意味として最も適当なものはどれか。

ア 子供との触れ合いを重視するあまり、絵に対する情熱を根底から失ってしまったということ

イ 自分で絵を描くことから子供に絵の技術を指導することへと、情熱の対象が移り変わってしまったということ

ウ 大人になりきってしまった自分自身と比べて、幼い子供の精神の純粋さに心を動かされているということ

エ 自分との人間的な接触の中で、子供たちの変化を見出すことに意義を感じるようになったこと

問九 本文の説明として適当でないものはどれか。

ア 「ぼく」のような大人が、簡単に踏み入れることのできない子供の奥深い心の世界を描いている。

イ 「太郎」と「ぼく」の心の交流を通して、自立へと向かう子供の心理を鮮やかに描いている。

ウ 絵のように自在に塗り替えられる子供の純粋無垢(むく)な心に、「ぼく」がしだいに惹(ひ)かれていく様子を描いている。

エ 芸術以上に、子供の心の不思議さに魅了されている「ぼく」の心の動きを描いている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、隠題(注1)をいみじく興ぜさせ給ひける御門(みかど)の、ひちりきを読ませられけるに、人々わろく読みたりけるに、木こる童(木ヲキル わらは)の、暁、山へ行くとていひける、

「このごろ篳篥(注2)をよませさせ給ふなるを、①人のえ読み給はざんなる。童 **1** 読みたれ」といひければ、具していく童部、「あな、(a)おほけな。②かかる事ないひそ。さまにも似ず。いまいまし」といひければ、「などか、かならずさまに似る事か」とて、めぐりくる春々ごとにさくら花いくたびちりき人に(b)問はばや(連レダッテイク わらはべ)といひたりける。さまにも似ず、**2**。

（「宇治拾遺物語」から）

（注1）隠題＝物の名をそれとわからない形で和歌に入れること

（注2）篳篥＝雅楽に用いる竹製のたて笛

問一 (1) (a)おほけな、(b)問はばやの本文中での意味はそれぞれどれか。

(a)おほけな

ア 立派な　**イ** 苦しまぎれな　**ウ** 身の程知らずな　**エ** 大げさな

(2) (b)問はばや

ア 聞いてみたいものだ　**イ** 聞いてみるといいだろう　**ウ** 聞かれたことだよ　**エ** 聞かれたらどうしようか

問二 ①人のえ読み給はざんなる。の説明として最も適当なものはどれか。

ア 歌人たちは「隠題」に従って和歌を作らなかったということ

イ しかるべき人でさえ「隠題」に対応できなかったということ

ウ 並の人には和歌を上手に詠むことができなかったということ

エ 決して世間の人々は和歌を詠もうとしないだろうということ

問三 **1** に入る語はどれか。

ア か　**イ** ぞ　**ウ** なむ　**エ** こそ

問四 ②かかる事ないひそ。とあるが、この時の「具していく童部」の気持ちとして最も適当なものはどれか。

ア 「御門」に対する畏れ　**イ** 「隠題」に対するあこがれ

ウ 「木こる童」に対する非難　**エ** 「木こる童」に対する期待

問五 **2** に入る文として適当なものはどれか。

ア 篳篥の名手なり

イ 思ひかけずぞ

ウ すべての童に和歌の能あり

エ 篳篥の題を忘る

四

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

太陽レキ(a)の作者は雪国には親切だった、と新潟県育ちの詩人堀口大学が書いていた。なぜなら二月が短く終わるから。待ちかねた三月の声を聞けば北国の寒気もゆるむはず。と思いきや、余寒どころか真冬を思わせる冴え返りに数日ふるえた▼①お前さん、それでも三月のつもりかい――とぼやきたくなる寒い風が東京にも吹いた。ユウガ(b)にも花見月とも呼ぶけれど、□の空の気まぐれは手ごわい。たとえるなら、お付きを翻弄(c)するわがままな姫様か。とはいえ春は、周囲にたしかに兆している▼②近くの公園で、毎年一番に芽を吹く柳が、あるかなきかの色ながら青んで見える。桜の枝々はうっすら赤みを帯びている。反色だったコブシの花芽も渋い緑に変じてきた。純白の花が枝いっぱいに群舞する日は遠くない▼桃の節句(d)を過ぎて、きょうは二十四節気(注1)の啓蟄。地中に眠っていた多彩な命がうごめき出す。地虫や蛇、蟻が「穴を出る」という季語が俳句にある。〈穴を出る蛇を見て居る鴉かな〉③高浜虚子(注2)▼虚子記念文学館に聞くと、実際にカラスがヘビを捕って食うかどうかはおいて、そんな意味に見ていいでしょうとのこと。生き物の目覚めはきびしい生存競争④への参入でもある。自然の掟を、どこかとぼけた味に写し取って面白い。

（朝日新聞「天声人語」から）

（注1）二十四節気＝一年を二十四区分した中国伝来の季節区分

（注2）高浜虚子＝明治から昭和にかけて活躍した俳人・小説家

問一 (a)レキ、(b)ユウガを漢字で書きなさい。

問二 (c)翻弄、(d)節句の読みをひらがなで書きなさい。

問三 ①お前さん、……つもりかいで使われている表現技法を何と呼ぶか。漢字三字で答えなさい。

問四 □に入る「三月」の異名（別名）をひらがなで答えなさい。

問五 ②近くの公園で、が直接かかっている文節を、同じ一文から抜き出しなさい。

問六 ③かなのように、俳句などで一句を言いきり、調子を整えるはたらきを持つ語を何と呼ぶか。三字で答えなさい。（漢字でもひらがなでもよい。）

問七 ④競争と熟語の成り立ちが同じになるように、次の□に適切な漢字を一字入れなさい。

競□